

これまでの道のりとこれから

清水 真好

この度、第10回檜の若木賞を頂戴しました清水真好と申します。今回このような賞をいただいたことは、この上ない荣誉であります。まず受賞に際して、常日頃から御指導下さっている先生をはじめ、展示活動に助力してくれたよき後輩達、そして選考に携わって下さった皆様に御礼申し上げます。

本年は、新型コロナウイルスによって様々なところで影響が出ており、例年開催される檜の芽会の奨学生談話会も残念ながら中止という運びとなりました。代わりにこのような場を設けていただき大変恐縮ではありますが、今回の受賞への道のりについて若干ご紹介させていただきます。

私は2018年12月から2019年1月にかけて実施した「京都市考古資料館合同企画展による地域への社会貢献活動」という成果で檜の若木賞に応募しました。この企画展は平成23年度から京都市と公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が「大学のまち京都・学生のまち京都」の特性を活かして、「研究・教育」の成果を紹介するというを目的として開催されています。当時は産経新聞や読売新聞、京都新聞の各紙に取り上げられるなど、京都のみならず、他府県までその活動を広く周知させることができました。

展示活動の趣旨としては、大学院生による研究の成果をもとに市民に紹介するもので、古代から近世の幅広い時代を対象とした京都の町と祈りの歴史について取り扱いました。京都の代名詞と言えば平安京として教科書でも取り上げられていますが、実際に平安京や京都においてどのような営みがあったのかについてはあまり知られていないのではないのでしょうか。そんな素朴な疑問を一つ一つ明らかにしていこうというのが私の学部時代からの目標でした。

そこで、どのようにして今回の合同企画展につながったのかというと、指導教授から「募集があるからダメもとで出してみないか」と紹介されたことがきっかけでした。当初、そんな面倒なことはしたくはなかったのが正直な心境でした。展示をするにはそれなりの時間と日数がかかり、今回の場合でも凡そ1年ほどの期間がかかります。具体的には、テーマの検討や関係機関との調整、チラシ・図録の作成、展示する資料の調査、記者発表など多岐にわたります。実のところは、先生曰く、学会や学術雑誌で報告するだけではなく、地域住民への理解を求めることが大切だということを伝えたかったようで、その提案を受けてみることにしました。結果として、企画展の案は採択されました。

実際にやってみると予想外に思い通りにいかないこともあって、大変な思いをすることもありました。1年という期間の中、院生2人と学部生6人で、各々大学の研究やア



アルバイトをこなしながら、一方で展示の準備をしなければならない状況下で、なかなか全員が揃うことはかないません。そのため、各人に個別の指示をしつつ調整を図るのが意外と大変で、全員が揃わず企画展のテーマを思案するために何回も話し合いの場を設けなければなりませんでした。

しかしながら大変な面もあればその逆も然りで、展示活動を通して気付かされたこともありました。これまでそれほど自分の研究を業界外の人に話すことはありませんでしたが、展示会場に訪れる人と触れ合うなかで、「自分の生まれ育った場所の歴史を知ることができて良かった」と言ってくれる人がいたのは、研究をやっている良かったと思わずにはいられない瞬間でした。

文系の研究は理系と比べて、目に見える成果を残しにくい分野であると一般的によく言われており、2015年には大学の「文系学部廃止」の議論が出たように、一時期社会を騒がせる事態となりました。ですが今回の成果を経て、自身の研究が地域史の発展に役立つことがわかりました。これを一つのステップとして、さらに発展させていきたいと思えます。

ただ基本的に特定の学問を除いて、学生が大学でやっていることというのは社会に発信しづらい傾向があると感じています。18歳で大学に入り、卒業した後も大学院で引き続いて研究をしていますが、なかなか自分の意見を発表することができる場に巡り合うのは稀なことであります。

皆さんの中には既に所属している方、若しくは卒業されている方もいるかと思いますが、学部ではゼミというものがあり、高校では経験しなかった“自分の考えを人に伝える場所”が設けられます。大学院になると指導教授から学会や研究会で発表するように促され（早ければ学部でデビューする人もいますが）、様々な発表の場を経ていくわけです。学問の世界を離れてしまうと、欲しくてもなかなかその機会を得ることはできなくなります。私は、今の学生の皆さんや卒業生の皆さんにはそのような発信することができる場所を大切に、様々なことにチャレンジしていただけたらと思っています。

ではこれからどのようにチャレンジしていけば良いのか、なかなかその答えを見つけることはできませんが、とりあえず私はSNSに注目してみようと思います。近年では、SNSをはじめとしたネット環境が整えられ、気軽に誰もが情報を発信することができます。まだ私は使ったことがないのですが、「バズる」という言葉が最近の流行語の一つにあります。『大辞泉』によれば「俗に、ウェブ上で、ある特定の事柄について話題にする。特に、SNSを通じて多人数がうわさをしたり、意見や感想を述べ合ったりして、一挙に話題が広まることを指す」とされています。ここでは情報の発信に関する問題性は別にして、つまるところ一つ的话题に対して多人数が関心を持つということのようです。これまでも指



配布資料

摘されてきましたが、これからはより一層社会に情報を発信していけるような人材が必要となってくると思います。

文化財に限って言うと、今年の5月に文化観光推進法という法律が施行されました。文化庁のホームページではこの法律について、「文化の振興を、観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興に再投資される好循環を創出することを目的とする」とあります。しかし課題もあるようで、「魅力的な文化資源が存在していても、その価値を分かりやすく解説・紹介する取組や、戦略的な発信ができておらず、文化資源の保存・活用が進まない」ことが要因の一つとされています。このような状況下で、SNSというツールを利用して、それぞれの地域の歴史であったり、良いところであったり、興味を持ってもらえたりするようなことを少しずつ発信していきたいです。

(No.4923 龍谷大学)